

## 12・13世紀のパリ大学と托鉢修道会

07H1030 嘉瀬智代

本論文では、アリストテレスの学問の流入が最盛期を迎えた12・13世紀において、信仰と理性の関係がいかに調和へと向かっていったかを問題とし、わけても当時の教会がいかにしてアリストテレスの学問を受容するにいたったかに焦点をあてた。この問題をめぐっては、トマス・アクィナスの『神学大全』によりアリストテレス思想とキリスト教信仰とがその和解をみたとするのが通説である。しかし近年、リチャード・E・ルーベンスタインは『中世の覚醒』のなかで、信仰と理性の関係は対立から調和へと転じたというより、両者に適切な一線を画することで健全な関係となり得たとし、その根拠をパリ大学において展開された信仰と理性に関する論争の中に求めている。また、横尾壮英は主著『大学の起源』のなかで、トマス・アクィナスの神学が神学教育と神学的思考の基礎となりえた要因にドミニコ会とパリ大学の存在を挙げている。当時の信仰と理性の関係をいかにとらえるかについてはさまざまな議論がなされているが、その中でも横尾の指摘する托鉢修道会がそれにもたらした影響については十分に議論が展開してきたとはいいがたく、この点をあらためて検討する必要があるように思われる。それというのも、パリ大学にアリストテレスの学問が導入された経緯には、托鉢修道会の教育活動が非常に色濃く影響しているからである。托鉢修道会の「信仰を守るための知」としての学問のあり方にいま一度目を向け、それが当時のパリ大学や教会がいかに影響したかを考察することで、信仰と理性の間に健全な関係が築かれていく過程を明らかにし、その際、その契機となった事象や人物を一つに定めるのではなく、社会の変化にともなう自然発生的な動向として信仰と理性の調和を位置づけなくてはならない。

11世紀末葉、人々の学問に対する関心が高まるなか、パリでは教育の中心が農村から都市へと移された。それまでは農村の修道院が主たる教育施設であったが、この頃にはより大勢の者を収容することができる都市の司教座聖堂附属学校や私学校が修道院に代わって活況を呈するようになっていた。その一つがパリ大学の前身である聖ジュヌ

ヴィエーヴの司教座聖堂付属学校であり、大学としては 1200 年に認可を受けている。それゆえ当初のパリ大学での教育は、それまでの付属学校での教育を発展させた、教会を中心とする教育であり、世俗の学が禁止され、神学を中心とした教育が行なわれていたのである。

ついで当時の社会状況についてであるが、都市が勃興し経済が発展しつつあった 12 世紀の西ヨーロッパでは、文書業務が世俗化され、識字能力のある俗人が増加するなど、それまで教会の独占物であった学問の世俗化が一段と進んだ。それと時を同じくしてアリストテレスの諸著作の流入が最盛期を迎え、学問に対する人々の関心はかつてないほどの高まりをみせたのである。本来、キリスト教における理性の用途は、聖書の曖昧な記述を解釈するときのみ用いられるものとされていたが、アリストテレスの著作を目の当たりにした彼らの一部は、理性は宗教的真理にいたる道を提供しうるのではないかと考えるようになり、その結果、神学やスコラ学を生みだした。信仰における矛盾を理性の力でもって解決し、真理を追求しようとするこうした学問はアリストテレス研究にさらなる拍車をかけ、こうして信仰と理性との関係のあり方が模索され始めていった。

むろん、キリスト教会はそうした変化に危機感を覚えていた。神の实在と行為を強調するキリスト教の世界観に対し、アリストテレスの世界観は自然および人間の営為の自律性を強調するため、教会は危機感を募らせていたのである。しかし他方で、教会は自身の権威を保持するためにそうした思潮や新たな知識に通ずる必要性をも認識していた。それゆえ教会にとっての課題は、科学的活動を宗教と関係づけることでいかにうまく正当化するかであり、その課題を教会に利するよう担ったのが当時都市を中心に活動していた托鉢修道会、とりわけドミニコ会とフランシスコ会であった。両托鉢修道会は現世をキリスト教化することと、それによる人々の救済を目的とし、異端に対して学識をもって対抗すべく学業に重きをおいて活動していた。それゆえ彼らの学業は、単に知的欲求を満たすために行なわれていた世俗のそれとは異なり、教会の脅威となるものではなかった。むしろローマ教皇はあらゆる場面で托鉢修道会に保護を与え、教皇直属の

団体として彼らを取り込んでいったのである。

学問の世俗化は人々の知的活動を促し、社会にはかつてない開放的な雰囲気が出ていた。こうしたさなかの 1200 年、その後のパリ大学に影響する騒擾が生じる。きっかけはあるドイツ人学生と居酒屋亭主との些細な諍いであった。しかしこの争いは市民と学生との対立に発展し、その中で数名の学生が殺害された。大学の教師たちはその補償を国王に要求し、これによりパリの教師と学生は聖職者たる身分を獲得した。それまで国王の裁判権下にあった彼らの法的人格と財産はパリ司教の教会裁判下へと移されたのである。しかし教師・学生らに与えられたこの特権は、かえって司教との闘争を誘発する引き金となった。当時、アリストテレスの著作に危機感を感じていたパリ司教は、教師・学生らの動向を監視すべく、その学監たる地位を利用して彼らの学問活動に制限を加えた。そのため、アリストテレスの学問に熱狂していた教師・学生らは、自らに課された諸々の制限に反発し、全面的に対立するにいたったのである。さらに 1229 年も 1200 年の騒擾と同様の事件が生じた。ここでは、学外の権力が国王の命令により介入し、罪のない学生までもが殺害されたため、教師・学生はこの不正な鎮圧に対する謝罪を国王に求めた。だが国王はこれを拒否し、パリ司教も紛争解決の努力をしなかったため、教師・学生らは集団でパリを離れることを決意し、他大学やパリの他の教育施設へと分散していった。これが一般に集団脱出と呼ばれる事件である。こうした状況に最初の一手を投じたのが教皇グレゴリウス 9 世であった。彼は 1231 年、勅書「諸学の親」を布告し、大学の側に立ってこの問題に介入した。この勅書において教皇は教師・学生に一層の保護を与え、大学組合に広範な自治を保証したほか、大学を管理・運営するチャンセラーとパリ司教の権限を厳しく制限している。加えて、危害・暴行などで大学組合員の利益が損なわれた場合、講義停止を執行することも教師・学生に認められ、これにより 1229 年のストライキと集団脱出が正当化された。このように教皇は大学の側に立って問題の解決にあたっており、この勅書が公布されたことにより、集団脱出していった教師・学生らはいったんパリ大学に戻る事となる。教皇がここまで大学側を擁護し

たのは、自らが制定した勅書を大学組合員に守らせることで、パリ大学を自身の直接的監視下に位置づけようと考えていたからである。

1229年の集団脱出は以後30年にわたって続いたとみられているが、このことが教師・学生らに予期せぬ事態を招き、さらには自らの地位をも失う結果となった。彼らが集団脱出を行っていた間、パリ大学ではいくつかの変化が生じていた。この変化の中で最も教師・学生らにとって不都合な変化と思われるものは、托鉢修道会のパリ大学進出であろう。当時のパリ司教は集団脱出により空席となった神学部教授席の一つにドミニコ会士を就け、これを機に四つの神学部教授席が托鉢修道会の教師によって占められた。神学部教授席は大学規定により12と定められており、ポストに就いた者がその職を離れる際は、自らの後継者をそのポストに就かせるという慣習があったため、この状況は在俗教師の大きな反感を買うものであった。それゆえ1231年、在俗の教師らはいったんパリ大学に戻ってきたのであるが、そこでは托鉢修道会がその勢力を強めており、在俗の教師が予想していたものとは程遠い状況が生じていたのであった。

しかし、托鉢修道会のパリ大学進出による影響は悪いものばかりではなかった。托鉢修道会は大学に進出してくる以前から、アリストテレスの学問を積極的に取り入れた神学・哲学教育を行ない、その時代としては比較的自由かつ高度な教育を行っていた。パリ大学進出後もこうした教育は続けられ、このことがパリ大学におけるアリストテレス学問の禁令を緩和へと向かわせる決定的な要因となった。彼らの進出によりパリ大学の教育は大きな転換期を迎えたのである。また、托鉢修道会がパリ大学に進出し、そこでアリストテレスを援用した活発な研究・教育を行なったことは、従来の「科学」の概念そのものにも変化を及ぼした。彼らはアリストテレス学問を「信仰に対立しうる科学」ではなく「信仰を守るための知」として捉え、学問に立脚した説教こそが異端に対する武器となりうると信じていた。こうした彼らの学問活動の最たる功績がドミニコ会士トマス・アクィナスに帰せられる。信仰を擁護するために理性を最大限活用する、これこそが彼の掲げる理念であり、それは彼の『神学大全』においてあますところなく示されて

いる。ここでは信仰の最終的優越を前提としながらも、それとの調和を失わずに理性を用いることで、アリストテレス哲学によるキリスト教神学の体系化が図られている。彼のみならず、托鉢修道会の教師らは「信仰を守るための知」としての「科学」の有用性を示すことで、信仰にとって有益な科学との向き合い方を教会に提示したのである。変化の著しい社会の中で、自らも新しい知識に対応していく必要性を感じていたキリスト教会にとって、托鉢修道会のこうした「科学」の捉え方は極めて有用なものであったからこそ、教会は托鉢修道会との結束を強めていったと考えられる。

西ヨーロッパの知の歴史が極めて重大な転機を迎えていたこの時代、托鉢修道会の学問が、「諸学の親」たるパリ大学とその擁護者たるキリスト教会に与えた影響ははかり知れない。それまで教会にとって脅威であったアリストテレスの学問は、教皇によって擁護された托鉢修道会がその学問とともにパリ大学に進出したことを機に容認へと向かい、パリ大学における信仰と科学との調和の動きが見え始めたのである。トマス・アクィナスの功績はその最も如実な例であり、彼がパリ大学で好んで行っていたスコラ学という授業形態は、教会の権威ある著作間の矛盾を解決する手段として理性を活用しようとするものであり、両者の調和を図るべく当時の大学の現場で生まれたのである。こうして科学は、托鉢修道会のパリ大学進出を契機に「信仰に対立しうる脅威」から「信仰を擁護するための武器」として正統信仰に受け入れられるようになり、こうした流れの中で両者は社会の変化に見合う形の調和を果たしていったものと思われるのである。